



Title	進藤家の人々 : 進藤家系譜稿
Author(s)	宮本, 圭造
Citation	演劇学論叢. 2000, 3, p. 41-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97571
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

進藤家の人々

—進藤家系譜稿—

宮本圭造

はじめに

進藤流は江戸時代はじめの進藤久右衛門忠次を祖とする脇方の流儀である。初代久右衛門忠次は京都山科の素人役者ながら、観世座の脇役者に迎えられ、その子孫も代々、観世座本脇として幕府の御用を勤めた。維新後にその芸系は絶えてしまいが、進藤流が能の歴史に占める位置は決して小さなものではなく、ことに江戸初期の進藤の活動は、後の福王や京観世の謡へと繋がる素謡の歴史を考える上でも見過ごすことの出来ないものであった。

表章氏『鴻山文庫本の研究—謡本之部—』（昭和四十年、わんや書店）によれば、進藤流の謡本は江戸前期、観世流について数多く刊行されていた。寛永初年刊と考えられる木田七兵衛刊本にはじまって、貞享三年刊の桂六左衛門本まで、二十種余の版行謡本の存在が知られており、その数

は同時期に刊行された下掛り全体の謡本にも匹敵するといふから、進藤流の謡が当時いかに隆盛をほこっていたかが窺われよう。

しかるに、その進藤については、早く柳沢澄氏が「進藤流の家系に就いて」（『観世』昭和十五年二月号）で、「進藤家に伝わる由緒書」「進藤家に伝わる書物」を紹介されたほか、表きよし氏が「ワキ方進藤流の考察—初代久右衛門・二代権右衛門を中心に—」（『国士館短期大学紀要』十六号、平成三年）で、初代・二代を中心とする進藤の活動を詳細に跡付けておられるものの、進藤の出自や代々の系譜など、なお不明な点が少なくない。本稿は、最近見ることの出来た進藤家に関わるいくつかの新資料をもとに、進藤家歴代の事跡を辿るとともに、従来、十分に知られていなかった進藤家の系譜を明らかにしようとするものである。

一 進藤の出自

まず、進藤の出自を問題にしたい。進藤流の祖とされる進藤久右衛門忠次が京都山科の出身ことは、諸書に見えるところであるが、その出自については、「京町人也」とする『当代記』、「進藤が家は元と山科の百姓」とする『猿楽伝記』のほか、「進藤は元素人にて近衛殿の家より出しと聞く」と近衛家との関わりを示す『隣忠見聞集』など諸説あり、いずれが正しいか定かでないのである。

そこであらためて注目したいのは、進藤が山科の出身であったという点である。実際、山科には現在も進藤町の町名が残されており、山科の地に脇役者進藤の一族がいたことは確かと思われるからである。例えば、忠臣蔵で大石内蔵助をかくまったのは「山科」の「進藤源四郎」であったし、古く享禄年間、しばしば京の九条植通のもとに出入りしていた「西山科進藤入道軒号竹葉軒」（植通公記）なる人物もいたほか、『史料京都の歴史』山科区関係文書目録・解説によれば、寛政年間以降、「山科」の岩屋神社社主職を勤めていたのも「進藤」姓の人物であった。

また、近衛家の菩提寺西王寺に伝わる近衛家諸大夫進藤家の系図『進藤氏系図』（元文二年、西王寺自端和尚筆。東大

史料編纂所蔵写真帳による）には、諸大夫十七代進藤俊家の子進藤基盛について、「山科進藤祖、雖為宗領、因病、住山科、有子孫、別記」という注記が見え、近衛家諸大夫進藤家の分流として、山科に住んだ進藤家の存在が知られる。この山科に隠棲したという進藤基盛と先に見た山科の進藤一族との関係が予想されるが、実際、山科岩屋神社神主の進藤家に伝わった『藤氏進藤系図』（進藤備教氏蔵。京都市歴史資料館蔵写真帳による）にも、進藤俊家の子として基盛の名が見え、そこに「基盛 与三左衛門尉、雖宗領、腰不直之故、住山科里」という、『進藤氏系図』と同様の注記されており、山科の進藤一族が近衛家諸大夫進藤家から分かれた家系であることが知られるのである。なお、『藤氏進藤系図』には、この進藤基盛の次男が「源四郎卜改、分家」したと見えるが、忠臣蔵で著名な進藤源四郎がその末裔であろうことは想像に難くない。そして、脇役者進藤久右衛門忠次もまた、この進藤基盛を祖とする山科進藤家に連なる人物であることが想像されるのである。

もっとも、右の『藤氏進藤系図』中に久右衛門忠次の名はない。『藤氏進藤系図』には、進藤宗次（仙助、新右衛門、伊予守）とその子進藤永次（長右衛門尉、又五郎）が江戸初期の人物として見え、忠次と「次」字が共通するのは注目されるものの、両者の関係を示す記事は見られないのであ

る。しかるに、進藤備教氏のもとには、久右衛門忠次に直接関わる、次のような一枚の系譜が別に残されていた。

西山進藤末流

基盛五代河内掾長恒弟
進藤與次右衛門 或与次郎

一樂 — 與七郎 —
女子

慶祐
進藤伊豫室

進藤伊豫

父ハ慶覺ト云、又伊豫、不知先名、
達武勇、有力量、初ハ出家也云々

進藤新右衛門
進藤久右衛門

同意三
同金十郎

養子

同杏圓

仕松平安芸守、知行二百石、醫者也、
後浪人、京住、又帰参

同元右衛門

二百石
藝州勤仕

進藤治部

進藤意三孫
仕青蓮院宮

冒頭に「西山進藤末流」とあるが、「西山進藤」とは進藤基盛に始まる山科進藤家のことで、その「末流」について記したのが右の系図である。年記はないが、末尾の進藤治部は享保十六年の没であり（後述）、この系図もそれとあまり隔たらない時期にまとめられたものと思われる。

さて、右の系図中程に「進藤久右衛門」すなわち進藤流の祖久右衛門忠次の名前が見える。これによれば、脇役者進藤家は進藤基盛を遠祖とする山科進藤家の分家筋にあたる家系であったことになる。もつとも、この系図に久右衛門の父として見える進藤伊予、また、久右衛門との関係は定かではないが、その傍らに記されている進藤新右衛門の名が、山科進藤家の系図『藤氏進藤系図』にも当主として見られることから察すると、久右衛門の父である進藤伊予は分家から出て、本家に養嗣子として入るなどしたのではないかと想像される。いずれにせよ、脇役者進藤久右衛門忠次が、近衛家諸大夫進藤の分流である山科進藤家の末裔であったことは、右に挙げた資料からはほぼ確実といえ、その意味で、『隣忠見聞集』が進藤久右衛門の出自を近衛家と関係づけているのは事実を伝えていると言えるのである。しかしながら、柳沢氏が紹介された「進藤家に伝わる由緒書」が、久右衛門忠次について「近衛様へ被召寄、御客分罷成、諸大夫被仰付」と記しているのは事実とは認め

難い。忠次自身が近衛家諸大夫を勤めていたことを示す確実な資料はなく、これは脇役者進藤家が近衛家諸大夫進藤家の分流であることによる後代の潤色とみてよいだろう。とまれ、久右衛門忠次以前の進藤家の系図がこれにより明らかになったわけで、なかでも進藤伊予という彼の父親の名前が知られたことは、進藤家と能との関わりを考える上で非常に大きな意味を持っている。次節では、その進藤伊予について見ていきたい。

二 進藤伊予をめぐる

表きよし氏が前掲論文で指摘されたように、神龍院梵舜の日記『舜旧記』には、謡講の記事に関わって、進藤伊予という人物が都合二十五回も登場する。例えば、

於清閑寺、謡講、始依催、予列座、神官十二三人来、各出錢三十錢也。稽古白髭、師道、山科進藤伊予来
(慶長七年三月二十二日条)

とあるほか、

豊国於兵部少輔宅、謡講興行、進藤伊与来、稽古玉井也
(慶長八年二月二十九日条)

掃除之久右衛門所ニテ、月次謡講興行、進与州来、稽

古盛久、予罷
(慶長十三年十月二十三日条)

当寺謡興行、進伊与来、稽古道明寺、朝ヨリ各来、終日迄之儀也
(慶長十五年二月二十八日条)

などとあり、梵舜の周辺で行われた謡講に、進藤伊予なる人物がしばしば参加し、謡の指導者の役割を果たしていた様子が窺われる。従来、この進藤伊予については久右衛門忠次との具体的な関係が明らかにされておらず、「久右衛門の子かも知れないが、受領号を思わせる「伊与(伊予)」なる名乗り(「与州」とも呼ばれている)は、久右衛門と同格の人物だったことを暗示するようにも思える」(表きよし氏前掲論文)とされるにとどまっていた。しかるに、前節で紹介した系図によって、この進藤伊予が進藤久右衛門の父親であることが明らかになったのである。

『西山進藤末流系図』によれば、進藤伊予は進藤慶寛(伊予)の子で、はじめは出家だったという。また、武勇にすぐれていたともあるが、彼の具体的な経歴について全く明らかにすることが出来ない。ただ、進藤備教家文書「免除状写」中に、

手前夫役事

西山為神主上者

向後令免除之

者也、恐々謹言

村井長門守貞勝在判

卯月廿三日

進藤伊与守殿御宿所

という免除状があり、この「進藤伊与守」が久右衛門忠次の父進藤伊予のことではないかと思われる。発給人の村井貞勝は織田信長のもとで京都所司代の任にあった人物で、天正十年（一五八二）に本能寺の変で亡くなっているから、右の免除状は天正十年以前に発給されたものであり、当時、進藤伊予は西山すなわち山科岩屋明神の神主であったと見られる。なお、「免除状写」には他に慶長元年（一五九六）の進藤又十郎宛、慶長四年・同六年の進藤新右衛門宛、慶長十三年の進藤又五郎宛の免除状の写しが収められている。『史料京都の歴史』山科区関係文書目録・解説によると、進藤備教家のもと西野村極楽寺の檀家であったが、寛政十二年（一八〇〇）より神道に改宗し、以後岩屋神社神主職をつとめた由であるが、右の免除状を信じるなら、天正から慶長にかけても同家は岩屋神社の神主職にあったこととなる。

この進藤伊予の没年については、『舜日記』元和五年二月十五日条に、「山科進藤伊与、去月十六日死去之由」と見え、元和五年（一六一九）の没であることが明らかである。享年は明らかでないが、子の久右衛門忠次が、十六年後の寛永十二年（一六三五）、七十余才（近代四座役者目録）

で亡くなっていることを考えると、進藤伊予の享年は八十近かったのではないかと推察される。

『舜日記』において、しばしば謡講にかかわって登場する進藤伊予という人物について、進藤久右衛門忠次の父であり、岩屋明神の神主であったことを見てきた。伊予守という受領号も、芸能者としてではなく、神主としての受領であったと考えられるが、神職の傍ら、謡の師匠として半玄人的な活躍を見せた進藤伊予の存在は、進藤家と能との関わりに前史と呼ぶべきものが存在したことを物語っているのである。

三 素人役者としての進藤久右衛門忠次

天正十一年（一五八三）、京都の手猿楽堀池宗叱が薩摩に下向し、当地で演能した折の記事が『上井覚兼日記』に見えるが、その一座の中に脇役者と思しき進藤又七、大鼓役者の進藤小次郎の名がある。この二人の進藤と脇役者進藤久右衛門忠次との関係は詳らかでないが、『近代四座役者目録』によれば、久右衛門忠次は堀池の弟子であり、進藤と堀池とは浅からぬ関係にあったらしいから、天正十一年の堀池の薩摩下向に同行した進藤が、進藤久右衛門忠次の一族であった可能性はかなり高いと言えそうである。伊藤

正義氏は「堀池―手猿楽とその周辺―」（『金剛』九十九号。昭和五十二年）の中で、右に見える進藤又七が久右衛門忠次と同人である可能性を示唆しておられるが、前節で触れた進藤備教家文書「免除状写」に進藤又十郎・進藤又五郎といった名前が見えることも、その推測を支持しよう。

こうした京都の町衆手猿楽に混じつての、比較的地味な活動を続けていた進藤にとつて、天正末年から文禄初年にかけて、豊臣氏の愛顧を受けるにいたつたことは、その活動の大きな転機となる。文禄二年（一五九三）四月二十六日の聚楽第における豊臣秀次主催の演能で秀次・下間少進の能の脇を勤めているのを皮切りに、文禄年間を通じて久右衛門忠次は豊臣秀次・秀吉周辺での演能に活躍する。「ワキ器用ニテ声近代ノヨキ声也」（『近代四座役者目録』）という美声によつて秀吉らから愛顧を受けた忠次は、その後、慶長年間にいたつても徳川家康から重用され、やがて観世座本脇として能界に確固たる地位を築き上げるのであるが、そのような観世座脇役者としての忠次の活動については、表きよし氏の前掲論文に詳しい。

もつとも、素人役者という進藤の出自を考えるなら、禁裏能における彼の活動にも注目する必要がある。例えば、元和七年（一六二二）十月二十一日、二十二日の両日行われた禁裏能は、手猿楽の渋谷紀伊守とその子因幡守・与吉

郎の兄弟が大夫を、そして進藤久右衛門と弟の権右衛門らが脇を勤めているし（『資勝卿記』、寛永四年（一六二七）十月の禁裏能も同じく大夫は手猿楽渋谷、脇は進藤兄弟が勤め（『慈性日記』）、さらにその前々年の寛永二年十一月の禁裏能も、『土御門泰重卿記』によれば、「大夫ハ虎屋弥九郎、ワキ進藤久右衛門兄弟、大ツ、ミ植田又四郎、小ツ、ミ伊豆、狂言六条の五郎右衛門、役者随分上手」といった役者によつて演じられた。進藤の出演が確認出来たのは、これら若干例に過ぎないが、こうした日記には大夫の名前しか記されないのがほとんどで、禁裏能における進藤の活動は、記録に見える以上に活発だったと見て間違いないだろう。進藤久右衛門忠次が観世座の脇役者である以前に、禁裏御用の素人役者であったことを、これらの記録は物語っているのである。

久右衛門忠次と禁裏との関わりで注目されるのは、彼が豊後守を名乗つたとする伝承のあることである。柳沢澄氏の紹介された「進藤家に伝わる由緒書」に、「近衛様へ被召寄、御客分罷成、諸大夫被仰付、豊後守ト相改罷在候」とあるのがそれで、久右衛門忠次は近衛家諸大夫として豊後守を名乗つたという。忠次を近衛家の諸大夫とするのが誤伝であることは先に見た通りだが、彼が豊後守を名乗つたのは事実と見られる。すなわち、『柳原家記録』（東大史

料編纂所蔵)に、慶長十七年(一六一二)三月五日、「ワキ進藤久右衛門」が豊後守を受領した由が見え(安田富貴子氏『古浄瑠璃』平成九年。八木書店)、久右衛門忠次が脇役者として禁裏から受領号を下されていたことが知られるのである。このことは、久右衛門忠次が頻繁に禁裏能に出演していた事実をも物語るが、そうした禁裏御役者としての活動は、おそらく忠次の若年時から晩年まで続いたと思われる、観世座の脇役者となった後もそれは変わることがなかったらしい。つまり、進藤久右衛門忠次の演能活動は、観世座の脇役者としての活動と、禁裏御役者としての活動が二つの大きな柱となっていたのである。

これに関わって、興味深い一件が寛永十一年(一六三四)九月の禁裏能をめぐって起こっている。この年、將軍家光は京都に上り、二ヶ月にわたって滞在したが、四座役者もそれに従って上京し、九月一日、二日の両日、仙洞御所において観世大夫重成、喜多七大夫による演能が催されている。七大夫の閉門の契機となったことで著名な演能であるが、この催しには進藤久右衛門と弟の権右衛門も出演した。その翌々日、今度は禁裏御所で仙洞御申沙汰の能の計画が持ち上がる。日野資勝の日記「資勝卿記」(東大史料編纂所蔵の田中勘兵衛氏旧蔵本謄写本による)に「薩摩守二被仰出て、長門ヲ此方二被留置候へハ、將軍様大夫役者ともを被残置

候て、御見物被成御満足ニ候」とあり、大夫には薩摩藩お抱えの虎屋長門、その他の役者には先日から在京している公儀御役者(進藤や葛野、森田らのことか)をも召すことになり、日取りを十四日とし、準備が進められている。しかし、進藤久右衛門は、来る十日には江戸に立立しなければならぬので、禁裏能に出演することが出来ないという。そこで、阿野亜相は「十四日ノ御能を十二日、十三日になりとも御能御急候て可有御下」との提案を所司代板倉周防に伝えるが、板倉は、「今度之御能過申候ハ、急役者共下可申由被仰付、役者共はや大かた下」っており、久右衛門兄弟を引き止めて、「シカラレ候へハ兄弟ノ者も迷惑仕候。又防州も迷惑」であり、急ぎ下るべきこと、そして「仙洞之御機嫌不悪様ニ兩人ノ者ニ心得可申上候由」の返答をし、結局、進藤久右衛門は禁裏能に出演することなく、江戸に下るのである。

この二ヶ月前の七月、在京中の將軍家光が、「猿楽の徒(中略)禁中へ出入せしむべからず」(徳川実紀)との旨を、武家伝奏日野資勝(「資勝卿記」の記主)に伝えている。素人役者の出身である進藤は厳密には「猿楽の徒」に入らないが、禁裏に対する幕府の牽制が厳しさを増していた当時の状況を考えるなら、進藤久右衛門も禁裏能への出演をすんなり了承するわけにはいかなかったのではなからうか。

いずれにせよ、これ以降、進藤が禁裏能に出演した記録を見出すことは出来ない。進藤の演能活動の軸足が、禁裏御用役者から公儀御役者へと移行しつつあったことを右の一件は物語るが、この翌年には久右衛門忠次も亡くなり、その後を継いだ弟の権右衛門信吉は、禁裏との関わりを絶ち、観世座脇役者としての活動に専念することになるのである。とまれ、観世庄右衛門元信がその著『近代四座役者目録』において、進藤を観世座の役者として扱わず、「近代シラウト芸者」の中で取り上げているのは、進藤が京都の素人役者の出身であったためであると同時に、観世座の一員として江戸城での能に活躍する傍ら、禁裏能にも度々出演するという、彼らの実際の活動をも反映した処置だったのである。

進藤久右衛門忠次はまた、藤堂高虎（高山公）のもとに親しく出入りし、しばしば御伽を行なっていた。桑田忠親氏の『大名と御伽衆』（昭和十七年。青磁社）に、「藤堂高虎の御伽衆としては、内閣文庫本『藤堂文書』によれば、大友道弥、角田朴祐、八十島道除、日皇宗悦、三宅亡羊、菱屋十二女、近藤久右衛門、同権右衛門、卜齋の九名があり」云々と見え、この「近藤久右衛門、同権右衛門」が進藤久右衛門忠次と、その弟権右衛門信吉のことと思われる。

『藤堂文書』（内閣文庫蔵）は、藤堂藩の「高山様御文庫」

の文書や、藩士からの聞き書きなどにより、江戸初期に編纂されたものであるが、桑田氏の先の文章のもとになったのは、そのうちの次の記事である。

高山様御伽之者、大友道弥、角田朴祐、八十嶋道除、日皇宗悦、玉置卜齋、三宅亡羊、菱屋十二女、近藤久右衛門、同権右衛門、其外公儀の御役者共参り、御伽仕候、一ヶ月二四五度程ツ、御夜咄有之、侍共之内年寄等茂合候者は、高知・小知となく、五人宛誰々と被仰出、御召被成由、兵右衛門・彦兵衛杯切々物語申候これによると、藤堂高虎のもとでは月に四五回、右の人々が召され、御伽が行われたが、ここに見える「近藤」が「進藤」の誤写であることは、同じ『藤堂文書』の別の箇所「進藤久右衛門、同権右衛門、其外公儀役者山本道句、御城坊主杯御伽仕居候時」、あるいは「高虎公之御前江、進藤久右衛門、権右衛門、十二女宗佐、等川丹齋杯罷在候」などあることから、まず確実と言えよう。『藤堂文書』はまた、「御老後者、御眼次第にうとく被成候得者、日々御登城御上り」なりがたく、「御近習衆御手を引、御両殿様の御前へ御出」になった藤堂高虎の晩年の様子を、「内記・重右衛門、其外進藤権右衛門」の談話として書き留めており、進藤久右衛門・権右衛門兄弟が藤堂高虎にしばしば近侍していた様子が窺われる。さらに、『藤堂文書』

には、次のような記事も見える。

其日二近藤久右衛門、同権右衛門参り、福嶋大夫殿に居申候久留嶋彦右衛門、牢人二而、頓而此近所に居申候哉、申上候得者、久留嶋ハ慥成者、よく被知召候、太夫所にて五千石取申候、本知二而は中々参り申間敷と被思召、壹万石可被遣候間、参り候得と、只今兩人参り申間候得と被仰付、兩人彦右衛門所江参り、申間候得者、御意身に余り難有奉存候（以下略）

これは「三宅亡羊覚書之写」として見える記事であるが、久留嶋彦右衛門を召抱えるべく、進藤兄弟が使者となつて、対応にあつたことが知られ、藤堂家における進藤が、単なる御出入りの能役者以上の存在であつたことを示す興味深い記事と言えよう。

これに關つて「藤堂文書」の中で、「近藤久右衛門、同権右衛門、其外公儀の御役者共参り、御伽仕候」、あるいは「進藤久右衛門、同権右衛門、其外公儀役者山本道句、御城坊主杯御伽仕居候」など、進藤について公儀役者の呼称が用いられていないのは、藤堂家における進藤の地位を考へる上でいささか注目すべきことと思われる。「藤堂文書」の先の記事に進藤兄弟とともに名前の見える「等川丹齋」は、京の素人役者の下川丹齋のことで、片桐登氏「江戸時代初期素人能役者考」（『能楽研究』三号、昭和五十二年）

に紹介される藤田家蔵「下川丹齋履歴」によれば、丹齋は度々江戸城の能に出演する傍ら、藤堂家より「浪人分合力」として二百石の扶持を受けていたというから、同様に進藤兄弟も、お抱え役者ではないにしても、藤堂家から何がしかの扶持を得ていた可能性があるのではなからうか。観世座の大鼓役者葛野九郎兵衛、笛役者森田庄兵衛のように、紀州徳川家お抱え役者と公儀御役者を兼帯した例もあり、公儀御役者でありながら、藩から扶持を与えられていたとしても不思議ではない。もし、そうであるなら、江戸初期の素人出自の公儀役者が、身分的に自由度の高い存在であつたことを示す好事例であると言えるが、これについてはなお後考を期し、今は進藤が藤堂家においてしばしば御伽を勤めていた事実を指摘するにとどめたい。

四 進藤以三をめぐる諸問題

進藤久右衛門忠次の演能活動が、素人役者としての活動と、公儀役者としての活動とから成っていたことは前節に見た通りであるが、忠次の没後、家督を相続して観世座脇役者すなわち公儀役者としての二代目を継いだのは弟の進藤権右衛門信吉であつた。この権右衛門信吉の代に進藤は江戸に居を移したようで、信吉以後の歴代は江戸に墓があ

る(後述)。これに対し、素人役者としての活動を継承し、なお京都を拠点に活躍したのが、これから述べる久右衛門忠次の嫡男進藤以三であった。

表章氏が『鴻山文庫本の研究』で指摘しておられるように、進藤以三は、脇の立役として舞台に立った形跡がなく、素謡を専門にしていたらしい。寛永期以降の相次ぐ謡本の刊行により、謡の享受者が爆発的に増加していたことが、その背景にあるものと思われる。そうした中で、進藤以三は、能とは異なる謡そのものの魅力を存分に引き出し、多くの支持者を集めた。進藤伊予・久右衛門忠次二代の活躍によって勢力を広げつつあった進藤流の謡は、この以三の代に一層の勢力拡大を果たすことになる。

〔以三の活動記録〕

進藤以三の活動記録については、『隔莫記』の記事を除いて、これまであまり紹介されることがなかったので、ここでまず当時の日記から以三に関係する記録を抜き出しておきたい。

A 『隔莫記』寛永十五年(一六三八)九月十三日条

於仙洞、御月見之詩哥(中略)詩哥濟、徒謡・御囃以上七番、為院命、徒謡四番者、予謡之指図也。朝長・邯鄲・蟬丸・天鼓也。御囃者、浮舟・松風・当麻是也。

今日初而、進藤以三謡聴聞也

B 『忠利宿禰記』寛永二十年二月十二日条

仙洞御夜入、飛鳥井大納言^五參。諷有。進藤意三

C 『尚嗣公記』寛永二十一年正月二十二日条

今日、進藤以三來。弟子徳兵衛・三郎右衛門・又兵衛・七兵衛・権三郎、以上六人來。有謡。檜垣・卒都婆小町・小原御幸・朝長、次、老松、切、少為祝言許也。後、又依所望、三番加之。三井寺・角田河・関寺小町。面白事絶言語許也

D 『尚嗣公記』正保三年(一六四六)八月十六日条

今日、以三・栄可來。有謡。応山・大覚寺殿御成。(中略)

栄可、檜垣 同、木賊 同、松風 同、景清
太郎兵衛^六、三井寺 以三、蟻通 同、小原御幸

又兵衛、蟬丸 以三、関寺小町 同、朝長

盛久、カタリヨリ 栄可・以三合シテ謡之。栄可シテ、以三ワキ也

E 『尚嗣公記』慶安元年(一六四八)十一月二十五日条

昼、梨門渡御。散翁・青雄來。茶湯也。以三來、有謡

F 『尚嗣公記』慶安三年三月十四日条

今日、飛鳥井大納言雅宣御振舞。(中略)昼、河原之

者来、ハウカアリ。入夜、進藤以三来。有謡二番。半部・関寺小町也

G 『忠利宿禰記』同日条

飛鳥井大納言へ鷹司太閤御所・同大納言房輔卿・同信平・九条太閤御所・同三位中将兼晴卿・近衛殿・隨心院御門主各御成也。はうかあり。四条河原方来。新藤いさん、うたいあり

H 『尚嗣公記』慶安三年四月二十六日条

今日、円満院被来。以三来、有謡。三井寺・撰待・楡垣・角田河・景清等也

I 『尚嗣公記』慶安三年十一月十九日条

今日、本願寺東門跡、茶湯。肩衝・南堂墨跡也。茶湯以後、以三、謡五番有之。蟻通・松風・角田川・俊寛・景清也

J 『豊光日次』承応元年（一六五二）十月一日条

今日、禁中様、公家衆御振舞御座候、イサン参、ウタイ、御鷹間二而御座候

Aの『隔莫記』は鹿苑寺鳳林和尚の日記、B Gの『忠利宿禰記』（宮内庁書陵部蔵）は壬生忠利、C D F Hの『尚嗣公記』（陽明文庫蔵）は近衛尚嗣、Jの『豊光日次』（鴨脚正彦氏蔵）は下鴨社社家鴨脚豊光の日記である。右の九例（FとGは同じ催しについて記したもので一例と数える）の

うち、仙洞御所・禁裏御所・東本願寺門跡での記録がそれぞれ一例、飛鳥井大納言邸でのものが二例、残る四例が近衛尚嗣邸での記事であり、撰公家・門跡衆、中でも近衛家、飛鳥井家での活動が目につく。

飛鳥井家に関しては、寛文・延宝期、心月亭孝賀なる人物が飛鳥井雅章の和歌談話を書き留めた『尊師聞書』（『近世歌学集成』（上）所収）にも、「歌は其人のたけよりは七分によめかし。万の芸も其通とみえたり。進藤以三か謡の時声を七分ほとにすれば能と申たり。尤の事也」と、飛鳥井雅章が謡の心構えについて以三から教示を受けていた由が見え、飛鳥井家と以三との親しい交流が偲ばれる。

その以三の謡について、近衛尚嗣が「面白事絶言語許也」と語っていることは、以三の芸風を窺う上で注目すべき記事であろう。以三一門による謡が新鮮な面白さに満ちていたことは、この僅かな記事からも十分に推察される。当時、以三はすでに多数の門弟を従えていたようで、CやDの記事には、以三の弟子として徳兵衛、三郎右衛門、栄可、太郎兵衛といった名前が見えている。

〔以三の謡伝書〕

進藤以三は門弟への指導にあたり、謡伝書の相伝にも熱心だった。辻宏一氏「筆の次」（『芸能史研究』七十八号。昭

和五十七年)は、彦根城博物館琴堂文庫蔵の以三自筆の謡伝書『筆の次』を翻刻し、その伝本や内容について考察を加えたものであるが、それによると『筆の次』には、琴堂文庫、東京芸術大学図書館、上野学園日本音楽資料室、そして法政大学能楽研究所鴻山文庫の二冊を含め、五冊の伝本が残されているという。さらに管見のかぎりでは、東京国立博物館、早稲田大学図書館(梅若誠太郎氏旧蔵本)、内閣文庫、神宮文庫(未見)にもそれぞれ伝本があり、以三の『筆の次』がかなり広く流布していたことが窺われる。以三が多くの弟子に同書を相伝したことの現れだろう。これら諸本のうち、東京芸術大学図書館本のみ、松田吉兵衛正方という門弟の名前が見える。また、琴堂文庫本には寛永十九年(一六四二)菊月日、誓故庵進藤以三正定の署名があるのに対し、内閣文庫本には「寛永二十年七月日作之進藤香意」とあって、門弟への相伝が数年にわたってなされたことが知られる。

以三の謡伝書には、この『筆の次』のほかに、『うたひの伝』(河村隆司氏蔵)という伝書もあった。奥書に「一炊庵以三 在判」とあり、ここに見える一炊庵の庵号は、鴻山文庫蔵の承応二年(一六五三)奥書の進藤以三章句本にも「一炊庵正定居士」と見え、誓故庵とならんで以三の名乗りの一つであったことが知られている。もともと、この

『うたひの伝』は『八帖花伝書』の巻三と全く同内容であり、以三の伝書としての程度流布したかは定かではない。

〔貞門歌人としての以三〕

以三は謡役者であると同時に、歌の数寄者としても、その名を知られていた。すなわち、小高敏郎氏『松永貞徳の研究』(昭和二十八年。至文堂)に、松永貞徳の門人の一人として、進藤以三の名が挙がっている。また、延宝五年(一六七七)の松永貞徳二十五回忌の際の『貞徳居士追福千首』(刊本)に以三の詠が載っていることが、表章氏『鴻山文庫本の研究』に指摘されている。

実際、松永貞徳の『逍遙愚草』(『貞徳家集』)には、以三の名が三ヶ所に登場するが、それらはいずれも以三と貞徳との親密な間柄を窺わせるに十分である。例えば、

以三、親にをくれられし時

鶯と音にや鳴くらんふるとしの泪のつら、春をむかへて
同じ人母にをくれられしとき

今ハ、やおもふ此世のヤミはれてす、しき道に月や入ら
ん

とあるのは、以三が父母に死別した時に貞徳から送られた詠歌であり、前者は寛永十二年に久右衛門忠次が亡くなった折のものと思われる。また、

這八雲御抄者、幽齋法印御奥書有之、寔可謂無双之證
本歟、而今進藤入道以三不意被盛得、仍予餘冤之、且
令悅目且憶法印御存日之昔、坐濕布袵而已

八雲たついつもやへかきくつけしその水くきにぬ
る、袖かな

と、進藤以三と貞徳との間で細川幽齋奥書「八雲御抄」の
やりとりのあつた由が見えるほか、

以三比叡山へ詣道すからの哥とも見せられけれハ
法の人舟をうかへて水海乃うらやましくもおもはる、か
な

と、以三が自作の歌を貞徳に見せるなど、歌を通じての二
人の親しい交流を伝えている。歌人進藤以三の足跡は、鴻
山文庫蔵の短冊「題八月十五日夜」のほか、松永貞徳廿五
回忌「貞徳居士追福千首」の詠が知られているに過ぎない
が、謡役者としてのかたわら、歌道にも精進する以三の姿
をここに見ることが出来るよう。

〔以三の没年〕

その進藤以三の没年については、延宝五年（一六七七）
刊の『貞徳居士追福千首』の作者連名に名前が見えること
から、「延宝頃まで、謡で活躍していたらしい」（表章氏前
掲書）、あるいは、「貞享の末か元禄の初めに亡くなったも

のと思われる」（辻宏一氏「筆の次」とされている。事実、
進藤以三正本の小謡、曲舞本がそれぞれ延宝二年、元禄二
年（一六八九）に刊行されており、元禄二年刊の京都の地
誌『京羽二重織留』にも、京で行われる月次謡会の一つと
して「進藤流意三門流」の謡会が高台寺内の昌純院で催さ
れていたと記されているから、進藤以三は元禄頃まで活動
していたらしく思われる。しかし、以三の没年は実際には
これをかなり遡るようである。

江戸時代、青蓮院宮の坊官を勤めた進藤家は、後述する
ように、進藤以三の末裔にあたる家であるが、同家文書
（進藤実輝氏蔵）のうち、文化十四年（一八一七）、進藤為純
なる人物によつて纏められた『年忌考』と題する資料があ
る。これは、日捲り形式で進藤家の祖先の没年月日や墓所
を記したもので、その十七日の項に、

一心院 寛文二年九月十七日 俗名進藤伊豫為元 後入道意三
天性寺 一、誓故庵浄観好意居士 百五十六年

と、進藤以三についての記述が見られ、そこに寛文二年
（二六六二）九月の没とあるのである。なお、以三が伊予を
名乗っていたとするのは誤伝と思われるが、為元という以
三の諱はこれによつてはじめて知られる。

進藤以三の没年は、地下官人の系譜を集めた『地下家
伝』所収の青蓮院宮「侍法師」進藤家の系譜にも見え、同

家の初代「為元 藤原忠次男」について「寛文二年九月十七日死」と記されている。ともに、青蓮院坊官進藤家の伝承がもとになつてゐるため、資料の確かさを相互に裏付けるものではないが、以三の没年について両書とも寛文二年と明記していることは注目されよう。先の以三の活動記録からも、寛文二年以降に以三が生存していた確証はなく、延宝五年刊『貞徳居士追福千首』に以三の詠が見えるのも、貞徳と縁のあつた歌人の歌を集めて貞徳二十五回忌に合せて延宝五年に刊行したに過ぎず、以三が当時存命であつたことを証する資料とはなりえないし、また、以三正本の小謡、曲舞本についても同様に以三没後に刊行された可能性が考えられる。すなわち、以三が延宝から元禄頃まで活動していたことを示す確かな資料は今のところ皆無なのであり、以三の没年をめぐるは、よほどの反証がない限り、青蓮院坊官進藤家に伝わつた寛文二年説に従うべきだろう。

〔以三の墓所〕

先の『年忌考』によれば、進藤以三の墓は一心院と天性寺にあつたという。一心院は知恩院の東にある浄土宗の寺。天性寺も同じく浄土宗の寺で、三条寺町にある。ともに江戸前期の進藤家の菩提寺であつたらしく、江戸中期以後、

青蓮院坊官進藤家の墓所は、青蓮院に近い浄土宗の定信院という寺に移つてゐる。

『年忌考』のこの記事をもとに、両寺を訪ねたところ、一心院では以三の墓を探し出すことは出来なかつたが、寺町の天性寺では、無縁墓地の中から以三のものと思われる次のような碑面の墓を見出すことが出来た(写真1)。

誓故庵浄観香意正定居士

南無阿弥陀仏

俗名進藤氏以三寛文二壬寅

寛永九月十七日

俗名に続けてそのまま寛文二年の年記があり、改行して「寛永」とあるのは不審だが、この墓碑によつても、以三の没年が寛文二年であることが確かめられる。また、以三の法名について、先の『年忌考』が「誓故庵浄観好意居士」とするのに対し、この墓碑は「誓故庵浄観香意正定居士」としており、「好意」「香意」の表記に相違が見られるが、内閣文庫蔵の『筆の次』奥書に「進藤香意」とあることから、これは後者の方が正しいのであろう。かつては多くの門弟が詣でたであろうこの墓も、今は無縁の墓に埋もれて当時の面影を知る由もない。

なお、『年忌考』には、以三のほか、彼の父進藤久右衛門忠次と、寛永十年代に脇役者として活動した弟の進藤金

写真2 進藤久右衛門忠次の墓

元禄頃まで以三正本の曲舞本が刊行され、また京都東山で「意三門流」の謡会が行われていた事実は、以三の没後もその門弟達の勢力が依然根強いものであったことを物語っている。貞享四年（一六八七）刊『能之訓蒙図彙』にも、地謡方の平岡長右衛門が進藤以三の弟子として見え、以三の一門は、師を失った後も、なお精力的に活動を続けていたらしい。しかし、以三の死によって、門弟達の結束が次第に覚束ないものとなっていったらうことは容易に推察さ

写真1 進藤以三の墓

十郎の名も次のように見えている。

寺町三條 寛永十二年十二月二日 俗名進藤豊後守忠次

天性寺 一、玄皓院宗誓久怡居士 百八十三年

寛永十九年七月二日 俗名進藤金十郎

天性寺 一、達誓好真忠元禪定門 百七十六年

ともに、天性寺に墓があったことが知られるが、久右衛門忠次の墓のみ、同寺の墓地に現存するのを確かめることが出来た（写真2）。以三の墓に比べてかなり大きな墓で、身の丈を越えるほどの高さだが、碑面はかなり摩滅がすすんでいて、碑文もほとんど読み取れない。判読しえた限りを左に掲げておく。

玄皓院殿宗誓久怡居士 寛永十二^文年^末十二月二日

南無阿弥陀仏

進藤久右衛門豊後守「」

れるところである。福王盛親（服部宗巴）の活躍によって急速に流勢を拡大しつつあった福王流に押され、進藤流はやがて勢いを失って行き、平岡長右衛門、小川庄右衛門など、門弟の多くもやがて福王流に組み込まれて行くことになるのである。

五 進藤家のその後

このように、京都における進藤流の勢力がとみに衰えて行ったのは、門弟を束ねてきた進藤以三の死去によるところが大きいと思われるのだが、以三に後を継ぐべき子供がいないわけではなかった。しかし、以三の子供はなぜか謡の道に入ることはなく、進藤伊予・忠次・以三と三代にわたって続いた謡役者進藤の系譜は以三を最後に絶えることになる。前掲の『西山進藤末流系図』によれば、以三には杏円（『年忌考』には「香円」とある）という養子がいたが、この進藤杏円は毛利家に医者として二百石で召し抱えられ、後に浪人して京都に住んだという。杏円は以三の婚養子であり、『年忌考』にはその杏円の妻で、以三の娘にあたる女性の法名向外院花屋法春大姉と寛文三年（一六六三）十一月十九日の命日が記されている。墓所は忠次や以三と同じ天性寺。『年忌考』には「文安・栄庵等之母也」と注

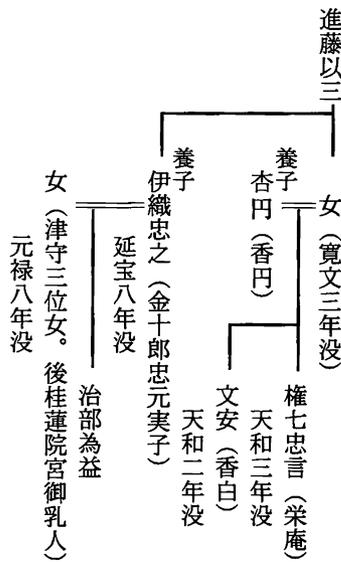
記があり、杏円との間に文安・栄庵らの子供があったことが知られる。『西山進藤末流系図』に杏円の子として見える進藤元右衛門（やはり毛利家に二百石で召抱えられた）はそのいずれかであろう。

進藤以三には、毛利家に仕える杏円のほか、青蓮院門跡の坊官を勤める子孫もいた。『西山進藤末流系図』に「進藤治部 進藤意三孫、仕青蓮院官」とあるのがそれである。青蓮院坊官進藤家に伝わった『歴代当主由来記』（進藤実輝氏蔵）は同家の歴代の年譜を記した書であるが、それによると以三の後を進藤忠之（了春、延宝八年没）という人物が継ぎ、その子供が進藤治部（為益）であるとしている。進藤忠之は同書によれば、「忠元男、為舎兄為元養子」とあり、以三（為元）の弟忠元の実子であったという。そして、ここに「忠元」とあるのは、寛永十八年（一六四一）に亡くなった脇役者進藤金十郎のことと思われ（『年忌考』に法名「忠元禪定門」とある）、これに従えば、青蓮院坊官の進藤治部は以三の孫であるとともに、金十郎の実の孫でもあったことになる。

一方、『地下家伝』によると、以三（為元）の後の系譜は、為信（為元息）、為益（忠元息）と続いている。ただし、為信の名は青蓮院坊官進藤家の資料中に見出すことが出来ず、享保十六年（一七三二）に八十一歳で亡くなった為益

を、寛永十八年（一六四一）没の忠元の息子とする点も年代的に齟齬があり、『地下家伝』のこの箇所の記事は誤伝が含まれているようであり、むしろ『歴代当主由来記』の記述の方に整合性を見ることが出来る。

これを整理して、没年などを『年忌考』その他の資料で補い、進藤以三の子孫の系譜をツリで示すと次のようになる。



進藤以三の子孫が青蓮院門跡に仕えるにいたった経緯は明らかでない。『地下家伝』は坊官進藤家の家譜を以三から始めており、今村義福の謡伝書『音曲玉淵集』にも、『進藤以三青蓮院御門跡にて景清の諷有しに青門の唱へをさけて、△柴門ひとり閉スト諷ひしと也。はじめたるとこ

ろへ行て諷ひなは主人の名字名乗とふへし」と、カザシ文句の例として、以三が青蓮院門跡の名を憚って、『景清』の「松門ひとり閉ざす」を「柴門」云々と謡い変えたことが見え、以三が青蓮院門跡に出入りしていたことは確からしいが、坊官の職にあつたかどうかは定かでない。青蓮院に坊官として出仕したことがはっきりしているのは、以三の孫の治部為益からであり、その後嗣もまた代々、坊官を勤めた。現在、宮内庁書陵部に坊官進藤家関係の文書が青蓮院文書として伝存するが、そのうちの寛政十年（一七九八）進藤為直編の坊官進藤家の家譜『進藤家伝』、同人編『進藤家記録写』、そして進藤実輝氏蔵の享和三年（一八〇三）進藤為善編『歴代当主由来記』を参照し、江戸後期までの坊官進藤家の歴代を記すと、治部為益（享保十六年没）の後、土佐法橋益俊（宝暦九年没）、常陸介兼左衛門益郷（安永九年没）、下野守為雄（享和元年没）、采女為善（嘉永二年没）と続いている。

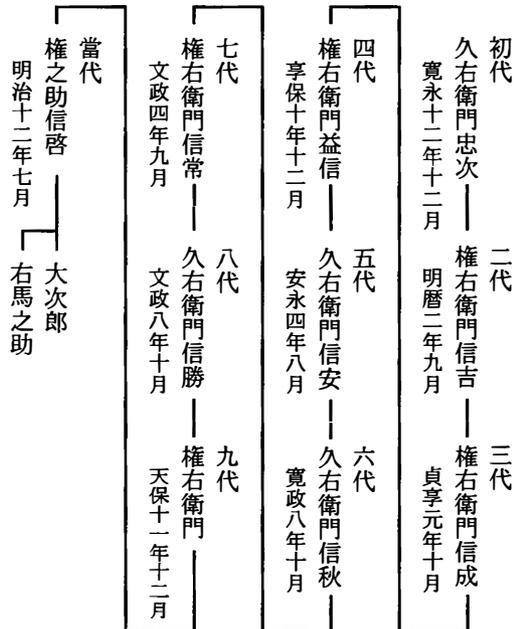
右のうち、進藤為善（為直）は進藤家に関する記録を多数纏めており、先に掲げた『進藤家伝』や『歴代当主由来記』などはいずれも彼の手になるが、同時に彼は、青蓮院文書の整理・編纂にあつたことでも、後世にその名を留めている。すなわち、大著『華頂要略』が、この進藤為善によって編纂されたものである。さらに、この為善の

孫にあたるのが、国学者・歌人として知られる進藤千尋（為周）その人であることを付言しておこう。

六、脇役者進藤の系譜

進藤久右衛門忠次・権右衛門信吉と続く観世座脇役者としての進藤家の系譜については、柳沢澄氏が前掲「進藤流の家系に就いて」の中で、安永八年（二七七九）に六代目進藤久右衛門信秋が書いた由緒書、慶応四年（一六六八）に十代目進藤権之助信啓が提出した由緒書の控えなど、進藤家に伝わる由緒書をもとにまとめられているほか、野々村戒三氏『能楽史話』（昭和十九年。春秋社）にも同じ資料によると思われる系譜が記されている。そのうち、柳沢氏稿に見える進藤家系譜を下に掲げておく。

これによって脇役者進藤家の系譜の概要は知られるが、歴代の当主を繋いだだけのごく簡単なものであり、進藤家の系譜としては十分なものではない。演能記録からは、右の歴代の他に、進藤権三郎、進藤権兵衛、進藤平右衛門といった役者の存在も知られるが、彼らの名前は右の系譜にはなく、その没年や進藤家歴代との関係についても不明な点が少なくないのである。そこで、さらに資料を博搜した上で、新たに脇役者進藤の系譜作成を試みたい。



〔本性院過去帳に見える進藤〕

青蓮院坊官進藤家の『年忌考』は、進藤久右衛門忠次をはじめ、従来、その没年が明らかでなかった進藤金十郎や進藤以三の忌日、そして彼らの墓碑の所在を書きとめている貴重な資料であるが、同書の八日の項に次のような記事が見えるのは注目される。

江戸浅草 明暦二年九月 俗名進藤権右衛門信政

誓願寺 一、潤聲院

百六十二年

江戸親世流脇師鉄炮洲ノ進藤久右衛門元祖也

明暦二年(一六五六)に亡くなった進藤権右衛門についての記事であるが、この進藤権右衛門信政が江戸初期に活躍した進藤久右衛門忠次の弟権右衛門信吉(明暦二年没)と同人であることは、「江戸親世流脇師鉄炮洲ノ進藤久右衛門元祖」という注からも明らかで、『年忌考』が諱を「信政」とするのは、「信吉」の誤りに相違あるまい。注目されるのは、ここに進藤権右衛門信吉の墓が浅草の誓願寺にあったと見えることである。

浅草の誓願寺は、大正大地震によって大きな被害を受け、震災後、武蔵野に移転している。一方、もともと誓願寺の子院だった十二ヶ寺は、これとは別に練馬区に移っており、進藤家の菩提寺はこの十二ヶ寺のうちの一寺であると思われるが、練馬区その寺々を訪ねたところ、はたして本性院という寺が進藤家の菩提寺であることが分かった。

本性院には幸い過去帳が残されていた。震災後にまとめられたものの由で、古い過去帳は全く残っていないが、それでも現存する過去帳には江戸時代の初めから檀家の命日が年毎に記されており、そこには進藤姓の人物も多く見られ、江戸時代の分だけで六十名を数える。近代にまとめなおしたものであるため、進藤久右衛門忠次の没年を宝永十

二年(寛永十二年が正しい)とするなど、書写の誤りも若干見うけられるが、進藤家の系譜資料として貴重な資料であることは言うまでもない。そのうち、主だった進藤姓の人物について、過去帳に見える名前、戒名、命日を以下に列挙しておきたい。

- a 進藤豊後守忠次 源流院宗譽久怡居士 宝永十二年十二月二日
- b 進藤権三郎信家 性月宗見禪定門 正保元年八月九日
- c 進藤権右エ門信吉 潤声院臣嚴淨翁居士 明暦二年九月九日
- d 進藤権十郎 秋岸正雲信士 延宝二年八月二日
- e 進藤権右エ門信成 寂照院至道淨繁居士 貞享元年十月十八日
- f 進藤権平兵衛 誠実院泰譽安信居士 元禄十四年九月二十七日
- g 進藤彦三郎 心譽常安勇哲信士 正徳二年十二月七日
- h 進藤権右エ門益信 高声院譽譽淨音居士 享保十年十一月十九日
- i 進藤久右エ門信安 永隆院泰譽淨安居士 寛延四年八月二十五日
- j 進藤長右エ門 実譽淨心信士 宝暦二十一年八月一日
- k 進藤久右エ門兄忠秋 唯心一乘随喜信士 寛政六年十一月一日
- l 進藤信幸 澄心院高岳良賢居士 文政三年十一月十一日
- m 進藤信幸弟 等々庵観斎信士 文政七年四月二十一日
- n 進藤久右エ門信勝 進精院栄寛道源居士 文政八年七月二日
- o 進藤平右エ門 得本院見樹道本居士 文政十三年一月二十五日
- p 進藤権右エ門 賢生院但然受樂居士 天保十一年十二月三日
- q 進藤平右エ門 究竟院道譽徳本居士 文久五年十二月二十二日

r 進藤栄太郎 信岳浄仰居士 明治元年十二月五日
s 進藤権之助 法性院利譽宗雲居士 明治十三年七月十三日

右のうち、acehinpの八名が柳沢氏の掲げられた進藤家系図の歴代に相当するが、過去帳と先の進藤家系図とは、五代目信安と八代目信勝の没年月日が一致しない。すなわち、iの進藤久右衛門信安(五代目)の没年を、過去帳は寛延四年(一七五二)八月、系図は安永四年(一七五五)八月としており、十四年もの相違を見せている。またnの久右衛門信勝(八代目)の命日を過去帳が文政八年(一八二五)七月二日とするのに対し、柳沢氏が紹介された『由緒書』は同年十月十五日としているが、これらはいずれも過去帳の方が事実を伝えていると見るべきだろう。『由緒書』によれば、五代目の信安は、過去帳に見える命日の三ヶ月後の宝暦元年(寛延四年。一七五二)十一月に六代目信秋に家督を相続、八代目信勝も、過去帳の命日の翌月に九代目に家督を相続したことになる。その相続手続きのため、事実とは異なる没年月日が『由緒書』に伝えられたものと思われるからである。実際、観世文庫蔵の享和二年(一八〇二)の進藤家『由緒書』(能楽資料集成「能楽諸家由緒書」所収)は、五代目信安の没年を寛延四年としており、過去帳と一致を見せているのである。

過去帳のうち、右の八名を除くのが、前記の進藤家系図には見えない人物であり、これらの進藤姓の人々については、この過去帳によってはじめて没年が明らかになったものがほとんどである。例えば、bの進藤権三郎信家は二代権右衛門信吉の子供であり、表きよし氏の前掲論文によると、寛永十六年(一六三九)から活動を始め、寛永十九年を最後に活動記録が途絶えているが、活動記録の絶える二年後の正保元年(一六四四)に亡くなったことが過去帳によって明らかになった。享年は不明だが、まだ二十歳そこそこだったと思われる。

dの進藤権十郎は歴代との関係が明らかでないが、三代権右衛門信成の子供ではなからうか。その三代目信成の初名が権十郎で、明暦二年(一六五六)に家督相続した後、まもなく権十郎から権右衛門に改名しているが、同時に権十郎の名をdの進藤権十郎が襲ったのであろう。彼もまた若くして亡くなったと見られる。

fの進藤権兵衛は、表きよし氏前掲論文に進藤権三郎の弟かとされている人物で、正保三年(一六四六)を皮切りに活動記録が見える。元禄頃の京都の地誌『元禄覚書』に、「京都屋敷有之役者」として名前の見える「拾人扶持 両替町通西方寺町 常在江戸 進藤権兵衛」が彼のことで、本家とは別に十人扶持を与えられ、分家の扱いを受けてい

たことが分かる。観世文庫蔵の進藤平右衛門家『由緒書』(享和二年)は、この進藤権兵衛を初代とする分家の由緒書であるが、子孫は代々、平右衛門を名乗り、幕末まで進藤久右衛門家の分家として、進藤の脇連を勤めた。gの進藤彦三郎はその二代目。三代・四代・五代の名は過去帳には見えない。

qの進藤平右衛門は、過去帳に文久五年没と見えるが、文久は四年までしかなく、文化五年(一八〇八)、あるいは文政五年(一八二二)没の誤写の可能性がある。前記の進藤平右衛門家『由緒書』に、六代目として見える進藤平右衛門は五代目の養子で、寛政十一年(二七九九)に家督を相続し、享和二年(一八〇二)当時の平右衛門家の当主であつたが、この六代目がqの進藤平右衛門と同人なのではなからうか。

そして、この六代目の次代にあたると思われるのが、oの進藤平右衛門である。彼は、『文化七年(一八一〇)猿楽分限帳』(能楽資料集成『重修猿楽伝記』所収)に、平右衛門家の当主として見え、文化七年当時の年齢が三十一歳であるから安永九年(二七八〇)の生まれ。同書に「養父平右衛門 実父平右衛門」と注があり、五代目の実子で、義兄の六代目とは養父子の関係にあつたことが分かる。その六代目が文化五年に亡くなった後に分家の家督を相続したの

であらう。

rの進藤栄太郎は、この七代目平右衛門の子供にあたると思われる、『重修猿楽伝記』観世座分限帳(天保十四年。一八四三)に、「父平右衛門 進藤栄太郎 卯四十一歳」と見える。扶持高は五人扶持で、これは慶応二年(一八六六)の御役者分限帳(『能楽盛衰記』所収)まで変わることがなかった。

jの進藤長右衛門は演能記録が見られず、kの進藤忠秋も、過去帳に久右衛門の兄とあるものの、具体的な動向は不明。

iの進藤信幸については、諱や没年が一致しないものの、先の進藤家系図に見える七代権右衛門信常と同一人物なのではないだろうか。権右衛門信常は、はじめ大次郎を名乗り、安永七年(二七七八)に権右衛門、寛政九年(二七九七)に久右衛門と改名し、文化十三年(二八一六)にふたたび権右衛門の旧名に復しているが、大次郎時代の安永五年五月、日光御社参祝儀能に出演した時の番組(観世文庫蔵)に、大次郎の諱が「信幸」と見えており、権右衛門信常はまた信幸とも名乗っていたらしいのである。没年からも、七代信常は進藤家系図の伝える文政四年(二八二二)ではなく、過去帳に信幸の没年として伝える文政三年の没である可能性が高い。信常の演能記録は、文政三年二月を最後

に途絶える。同年十月五日の江戸城本丸奥能には、信常の子である八代信勝と、進藤流の弟子大塚長兵衛がワキを勤めており、信常は全く出演していない。弟子の大塚はこの時が江戸城での能の初役で、文政三年十月から翌四年四月にかけてワキを勤めているものの、これ以降は記録に見えない（鴻山文庫蔵『触流御能組』）。それは文政三年十一月に七代信常が急逝したために、急遽、弟子である大塚が代動したからではないかと考えられるのである。すなわち、七代信常の没年は『由緒書』に見える文政四年ではなく、それより一年早い文政三年であった可能性がきわめて高いのである。

右のほか、過去帳には延保四年二月四日没の「光蓮院清譽乗真居士 進藤権右エ門」なる人物の名も記されている。延保四年とあるのはむろん誤写であり、過去帳に、この権右衛門の娘と思われる「進藤氏光蓮院娘イヨ」の名が寛保四年（延享元年。一七四四）の没として見えることから、権右衛門の活動時期は寛保前後と推察される。実際、元文三年（一七三八）から延享二年（一七四五）にかけて、五代久右衛門信安とともに、進藤権右衛門なる役者が頻繁に江戸城でワキを勤めており（鴻山文庫蔵『触流御能組』）、これが先の過去帳に見える権右衛門のことと見られる。その活動状況から、過去帳の「延保四年」は延享四年（一七四七）

の誤写とみて間違いないだろう。この権右衛門は、五代久右衛門信安の子供である可能性が高いと思われるが、進藤家歴代の名乗りである「権右衛門」を襲名していることから、当時、彼は五代信安の嗣子と目されていたと考えられる。しかしながら、その権右衛門は延享四年、父よりも先に亡くなっている。父の信安は当時すでに六十四歳。次代を継ぐべき権右衛門の突然の死は、進藤家の継承に大きな不安をもたらすことになる。急遽、嗣子探しが行われ、慌しく養子栄次郎を迎えたのは翌延享五年（寛延元年。一七四八）五月のことである。これが後の六代信秋で、養子入り当時の年齢は二十一歳。その翌寛延二年、江戸城での初役を果たしている。五代久右衛門信安が亡くなったのは、これより僅か二年後の寛延四年八月であり、養子栄次郎への正式な家督相続が済まされるのは、そのさらに三ヶ月後のことだった。

このように、本性院の過去帳によって、従来の進藤家系図の誤りを修正しうる点、また新知見として付け加えるべき点は二三にとどまらない。この本性院の過去帳、そして前節までで触れた進藤家の系譜資料をもとに、進藤家の系譜はかなり細かなところまで明らかにすることが出来るといえよう。そこで、これまで述べてきたことを踏まえ、本稿の末尾に進藤家系譜稿を示しておきたい。なお、歴代の

享年は、『將軍宣下能目錄』（親世新九郎家文庫藏）や前記分限帳などに記された年齢をもとに算出したものであり、歴代の妻や子供についての記述は主に本性院過去帳に基づいている。

おわりに

明治維新を迎えた時、進藤家の当主権之助信啓は三十八歳。分家の進藤栄太郎は六十六歳だが、同年の十二月に他界。信啓の長男の大次郎はまだ四歳の幼児だった。維新の混乱は、進藤家にも大きな打撃を与えたと思われるが、この前後の彼らの動静について、あまり多くを知ることが出来ない。『能楽盛衰記』上巻に、「維新當時の家元権之丞は零落してゐたので、親世清孝が救ひ出し、其の家に居らしめた」とあり、一時、親世家のもとに寄寓していたらしいことを知るのみである。その後、明治七・八年頃になって、権之助は梅若六郎宅での能の催しにしばしば出演するなど、再び脇役者としての活動を始めるが、明治十二年に四十九歳で世を去っている。

権之助信啓が亡くなった時、息子の大次郎は十五歳で、当主として脇役者進藤家を支えていくには、まだあまりに若かった。かくして、協方進藤流はついに廃絶を余儀なく

されるのである。その後、進藤大次郎は「全く別方面の藝界」である「江戸噺」の世界に入ったと柳沢澄氏「進藤流の家系に就いて」は伝えている。すなわち、明治・大正・昭和の長きにわたって活躍した江戸落語の大家入船亭扇橋（八代目）が、実は進藤大次郎その人なのであった。

八代目入船亭扇橋は、「昔の芸道修業」（『痴遊雜誌』昭和十年・十一年）に自ら記すところによると、若い頃、深川の呉服屋の小僧をしていたが、流しの声色屋を経て、二代目滝川鯉かんの門人となり、落語の世界に入ったという。明治二十一年、八代目扇橋を襲名し、以後、四十年の長きにわたって、この由緒ある名跡を守り、昭和十九年、数えで八十の長寿を全うしている。なお、彼は以時庵と号して俳諧をも能くした数寄者で、『痴遊雜誌』にも数多くの句作が見える。

その扇橋の子、進藤勝利もまた落語家となった。『落語全集』第六卷（昭和五十七年。立風書房）には、昭和十八年、三代目柳亭燕枝を襲名したとある。親に似て多才の人物で、三味線を引き、能書・画才で知られたが、昭和三十年に六十一歳で亡くなり、後嗣もなかったため、彼の代を最後に進藤家は絶える。晩年の勝利は行方不明に近い状態であったようである。進藤家に伝えられてきた由緒書などの資料も、今となつては見る事が出来ない。

かくして進藤家の歴史は名実ともに終焉を迎える。かつて繁栄をほこった進藤流であるが、江戸中期以降、素謡の分野で福王流に勢力を奪われ、さらには謡そのものにおける脇方の主導的立場も失われていくに従い、進藤流の流勢は次第に衰えて行く。進藤は、地方諸藩への勢力拡大の面でも他流に大きな遅れをとっていた。宝暦十二年（二七六二）刊『改正能訓蒙図彙』によれば、諸藩で進藤流の脇を採用しているところは、尾張藩のみという状況で、その尾張藩でも脇方は進藤流と高安流との併用であった。進藤の本貫の地とも言うべき京都においても、貞享刊『能之訓蒙図彙』には、京住の進藤流の脇役者として、尾張藩お抱えの松田又市（本阿弥辻子に住んでおり、本阿弥の一族と認められる）のほか、黒川又三郎、三宅長左衛門、小坂井勘三郎の名が見えるのに、宝暦刊『改正能訓蒙図彙』では二十三名の脇役者中、進藤流の役者は全く見られず、進藤流の退潮は否定すべくもない状況にあった。こうした状況に鑑みると、進藤が維新後まもなくして舞台から姿を消したのは、ある意味、当然の帰結であったといえよう。

〔付記〕 本稿をまとめるにあたり、過去帳閲覧を許可いただいた

た本性院御住職三輪俊輔氏、『うたひの伝』の存在を御教示いただいた河村隆司氏、進藤備教氏・進藤実鍾氏蔵文

書の写真帳閲覧に際し、便宜を図っていただいた京都市歴史資料館はじめ、多くの研究機関のお世話になった。末筆ながら、深謝申し上げる。なお、本稿は平成十二年度科研費補助金の成果を成稿したものである。

〔追記〕

脱稿後、『華頂要略』門下伝諸家第一にも進藤家系譜が載っているのを知った。本稿で取り上げた資料をもとに編纂されたものであるが、若干の新見もあるので、また別の機会に追考を試みたい。

